
十一人の侍

大輔華子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十一人の侍

【Nコード】

N5025U

【作者名】

大輔華子

【あらすじ】

神武真興流剣術の宗家の直系である椿太郎ちんたろうと別居中の妻梨華りか。稽古場（道場）で起こった悲惨な事件から物語は仇討劇へと展開していく。

ごはんライス先生の課題に対応しての投稿です。師のキャラクターである珍太郎先生・梨華・ロリ華を使わせていただいて物語を展開するという、大変有難い課題です。

シバリは三人家族の夫婦別居、という設定だけで、今回は時代劇仕立てに致しました。元のキャラがキャラだけに、ちょっとエッチと

ザンギヤクが入っていますので、気を付けてくださいね。ちよっぴりお涙ちよっぴりできれば私的には十分満足です。

浮世絵師、椿太郎

時は江戸時代中期、享保七年（一七二二年）、壬寅（みずのえとら）。

元禄十五年の赤穂浪士討入り事件から二十年を経た今、ここは江戸の町である。

徳川家宗家以外の御三家の一つ、紀州徳川家から江戸幕府八代將軍に就任した徳川吉宗が、政治・経済の改革、いわゆる享保の改革を主導していた時分である。

望月椿太郎は流行りの浮世絵師であった。

椿太郎が浮世絵師となった経緯については、彼の少年時代にまで話を遡らなければならない。

彼は由緒ある武道家の家柄に生まれ育った。

その昔、いわゆる戦国時代末期から安土桃山時代にかけて、神武真興流剣術の創始者として世にその名を馳せた剣客、望月椿太郎左衛門という士がいた。

椿太郎は七代目椿太郎左衛門の実子であり、まさに一族の直系である。彼の母は未だ彼が幼少の頃、河豚ふぐの毒にあたって非業の死をとげた。このため彼は上女中に身の回りの世話だけを受け、寝る時間と食事をする時間以外、一日の多くの時を父とともに過ごした。彼は師範である父から直々に剣術の手ほどきを受け、いずれは免許皆伝となって宗家を継ぐはずであった。しかし、彼は剣術がすこぶる不得手であり、稽古場（当時は道場のことを稽古場と言った）の師範代を務めていた清水又吉（免許皆伝）も、彼が宗家の跡目になるということは到底無理と諦めかけていた頃、彼の才能は剣術とは全く異なる別の方向へと突然花開いた。幼少の頃から父の目を盗んでは敷地内のはなれに建てられた古い武器庫の中で、稽古場（道場）に置き放しとなっていた瓦版の挿絵を見て、そこに描かれている浮

世絵の美人画に心奪われ、日々目を肥やしていたのであった。こうして椿太郎は一族始祖の元服年齢、十六を数えるころ稽古場（道場）を自ら離れ浮世絵師となつて主に美人画、春画（色事絵）を手がけるようになった。

彼は浮世絵の絵師（版画の下絵を描く者）であるが、同時に彫師・摺師も兼ね、その芸術的な才能と器用さは傑出したものだった。

彼はその後、浮世絵のいわゆる「モデル」をしていた町人娘、梨花と縁を結び、二人の間に娘、紹利華（るりか）をもうけた。やがて娘の紹利華が物ごころ付いてくると、今度は彼は娘をモデルに少女春画を描き始め、これがまた江戸市中で一時大評判となり彼の浮世絵はかなりの高値で売れるようになった。

ところが、ある日これが時の將軍吉宗公の手に渡った。

「いとおかしかるも、面妖なり……」

「いえいえ、將軍様。破廉恥にも程がございます！ ほれ、此は未だ下のものも生えあらぬ幼な子にござります」

老中・若年寄など当時の幕府の重鎮たちは烈火のごとく怒り、裏で出回っている椿太郎の少女春画を片っ端から回収しては皆で回覧し、「けしからぬ。言語道断たるもの」と口々に言い、その絵を細部にわたりしつかりと検閲し眉をしかめた。結局のところ椿太郎の浮世絵は、巷の風紀を甚だ乱したとして、幕府は椿太郎を即刻捕らえ伝馬町牢屋敷に監禁し裁きを受けさせるよう、当時江戸南町奉行の大岡忠相（越前守）に命じた。忠相は椿太郎に当時の捕獲懸賞金としては破格の米十石（百斗、米俵で約二十五俵）を与えることとして手配された。米十石というと、当時の金銭相場としてはおよそ二十両。現在の貨幣価値としては約四百万円程度である。かくして椿太郎は梨花を一人家に残し娘の紹利華をつれて逃亡し、浮世からその姿をくまますこととなった。彼は今もなお少女春画を描き続けており、密売ルートにてこれを高値で売り、巷の目を逃れひっそりと目立たない場所で生活を送っている。

椿太郎の妻、紹利華の母の梨花の生い立ちはというと、彼女は幼

い頃親に捨てられて長屋の住人に拾われそこで共同で育てられた。このため、特定の育ての親もなく、親というものを知らない。十五歳を数える時、浮世絵師椿太郎に見初められ、住み込みでいわゆる春画の『モデル』になり、その後彼と夫婦となった。椿太郎が手配犯となつて突然娘の紹利華を連れて家を出た後は、役人に捕らえられることを避けるため記録帳の上で婚姻関係を解消したが、戻るべき実家のない梨華は行くあてもなく、結局椿太郎の実家である望月家に身を寄せることとなった。梨華は身の回りの生活に不自由することはなかったが、椿太郎との生活を失い、失意のどん底に陥っていた。

神武真興流剣術

神武真興流剣術の稽古場（道場）は、椿太郎の実父である師範の七代目椿太郎左衛門、師範代の清水又吉（免許皆伝）、何某一刀齋（指南免許）の三名によつて支えられており、その下に指南役心得所（こころえどころ）として、男士五名、女士一名の計六名の上級剣士が教授指導にあたり、武家の子息や町人など約六〇七十名に剣術を教授している。

当時、幕府は町人が武術の指南を受けることを忌み禁止していたが、時代の流れには逆らえずこれを黙認していた。

師範代の清水又吉はかなりの剣術のつかい手であった。そこそこの年のいった士であったが、剣術一筋末だ独身であつて、ときに梨華を稽古場（道場）へ寄らせ何かにつけて話し掛けてきた。

「梨華殿、そなたの夫、椿太郎殿はまっこと美人画が得手よのう。此はそなたを模したものでござらう？」

「左様にござりますが……」

又吉の手元には椿太郎の描いた浮世絵があつた。よく見ると美人画でなく春画の方である。浮世絵春画はこの年幕府が好色ものを禁止したあとを受けて世に出回っている『あぶな絵』とは異なり、わかり易く言つと『完全無修正版』である。しかも女性自身をかなり誇張したものが多く、描き手の絵師がいわゆる『モデル』を必要としていたのもそういう事情によるものだ。

やっただあ。これって本人を前にして見ちゃっていいワケ？

「又吉様。恥ずかしゅうござりまする。どうかこのような淫らなるものは……」

「いやいや。げに美しくうづむる。気になさるでない」

気にするよ。他の範となるべき師範代が、神聖な稽古場でそんなもの見てるって師範に言いつけるぞ！ この、ど助平！

「又吉様。どうかご覧なされませぬよう。ねえ、又吉様」

「ふむ。そちはちと、痩せたであろうか」

「いささか痩せました。頬の肉がおち申した」

「普通、尻より痩せて参るのが常なるがのう」

ムッ！ 普通じゃなくてごめんねっ！

「は、は、は。この尻が、ますます大きゅうになりおって……」
バシッ！

又吉の頭の辺りで大きな音がした。梨華の手には草履が握られていて、又吉の額にははつきりと草履の痕が付いていた。

「又吉様。お頭かしらに蚊のとまりて、これを仕留めようぞと……。なれど、打ち逃がし申した」と梨華。

「……………。かたじけのうござる…………。むっ」と又吉。

そこへ唐突に、血相を変えた指南役心得所（こころえどころ）の男が走りこんできた。

「大事にござりまするー！」

「いかなされた」

「稽古場荒らしにござりまする」

「何となー！」

稽古場荒らし（道場破り）

稽古場荒らし（道場破り）の主は「南町奉行、海老原伴太郎」と名乗った。格好は鎧をまとい髪が落ちていて、まるで時代を飛び越えて戦場から飛び出てきたようないわゆる落武者そのものだ。しかし、その精悍な顔付きからは鋭い眼光が放たれており、姿勢に一分の隙も感じられない。まさに稽古場荒らし（道場破り）を絵に描いたようなはまりようである。

「たのもう！ 腕に覚えのござるものは出会いなされい！」

指南役の心得所（こころえどころ）はその風貌と隙のない堂々とした態度に、皆震え上がってしまったている。

梨華はただごとでないと察し、即座に身を小屏風で仕切られた場所に隠した。

師範代の清水又吉は、立ち上がり一同を見渡して、何某一刀齋（指南免許）の名を発した。

「何某一刀齋！」

「ははーっ」

「何某一刀齋！」

「ははーっ」

「何某一刀齋！」

「ははーっ」

「これ！ 一刀齋！ お主、ははーっと言いながらどんとどんと下がっているではないか。かの無頼漢を手討ちなされい」

「……………」

「早うせぬか！」

それは一瞬のことだった。指南免許の一刀齋は木刀をまともに胸にくらいその場にうずくまり、倒れた。口からは大量の血がほとば

しり稽古場の床はたちまち赤く染まった。稽古場（道場）に通う皆の憧れの的であつて見事な剣術の使い手であつた一刀齋が一瞬にして打ちのめされた瞬間だつた。

「ひいいい！」

一同はこれを見て一斉に土下座し額を床につけた。

免許皆伝の清水又吉が愈々（いよいよ）覚悟を決めて木刀を握つた。

相手の稽古場荒らし、海老原伴太郎と名乗る男は五尺三寸（約一五九センチ）の木刀を上段に構えた。

「かーっ！」

仕掛けたのは清水又吉だつた。しかし、彼の木刀は握り手のすぐ脇を巧みに叩かれ無残にも弾き飛ばされた。その時点でもう又吉は丸腰であり、降参しなければ命はないものだつた。

それでも又吉は素手で相手に掴みかかろうとし、次の瞬間伴太郎の木刀の先は天井を指した。誰もが又吉の背骨が伴太郎の木刀で碎かれることを予想し目を覆つた。

そのときである。伴太郎の木刀と又吉の間に割つて入つたのは、師範であり梨華の義父である望月椿太郎左衛門だつた。鈍い音がして師範は又吉の代わりに不幸にも頭を碎かれその場に沈んだ。

瞬時にして師範の『命』は彼の稽古場（道場）に散ることとなつた。

床に転がっていた師範代の又吉は気を動転させながら叫び狂つた。

「師範！ 師範！」

振り返つて伴太郎を睨み付けた又吉の目はもはや尋常なものではなかつた。

「おのれ！ 往ぬるか！ 許されざる者。地獄の底まで道連れに致し候ぞ！」

又吉は稽古場の奥正面に奉られている打刀（うちがたな）の方へ走つて行つた。何をしようとしているか誰にも理解できた。

この時代の『仕合しあひい』は竹刀ではなく必ず木刀で行われていた。このため仕合しあひいは命がけのものであり、ほとんど行われることはなかった。木刀と言えどもまともに打たれれば命を失うことになるからである。

しかし、結果として同じ殺し合ころもいであっても、『木刀』と『真剣』とでは意味が全く違う。

木刀はいわゆる『仕合しあひい』であり、真剣は殺し合ころもいのいわゆる『決闘』である。結果が同じであっても動機がまったく異なるのだ。ましていかなる無頼漢の乱入であっても相手が木刀で『仕合しあひい』を申し入れて来たのであるから、真剣を持ち出すのは完全に常軌を逸した行為である。そもそも木刀は真剣の抜刀を受けることができず、同じ条件下に行われる決闘にすらならない。それは単なる殺人行為である。

「清水殿！ 仕合しあひいにござりまする！」 「清水殿！」 「清水殿！」

指南役心得所（こころえどころ）は皆、狂気乱心の師範代、清水又吉を止めにかかっていた。

梨華は町民の出身であったが、土がやってはいけないことをやるうとしていただけは感じ、小屏風から走り出て、転がるようにして又吉の足をつかんだ。しかも両の足のふくらはぎを抱きかかえるようにして……。又吉はつんのめるように倒れ、床に伏せた。

そして正気に戻った。

「……梨華殿。かたじけのうござる」

伴太郎と名乗る男は、稽古場を出るときに声高らかに言った。

「稽古場（道場）を存続致したくば、金五百両、千住の代官所に持てい……」

町方の南町奉行に勤務する伴太郎が、なぜ勘定奉行配下の代官所に金を収めるよう要求するのか……。『政治』がまったくわからない梨華には理解できないことだった。

（なお、千住の代官所に当時、悪徳代官がいたという意味では決まてない。『千住』というのは物語上の都合にて便宜的に登場するものであることを申し添える。）

梨華は悲惨な一部始終を目のあたりにして、師範であり梨華の義父である望月椿太郎左衛門の死と、百五十年以上続いた家族の断絶に悲しむ一族の心を思いがけず味わうこととなった。

梨華には父も母もない。彼女にとって望月家は家族であり、義父の死は実父の死も同然であった。

そして彼女は、それを彼女自身の怒りに変えることによって、復讐を心に誓うこととなった。

意を決したその日、彼女は望月家を出た。

家族の再会

梨華には椿太郎から伝令を通じて彼のいる隠れ家から今でも文が届く。

梨華は、後を付けられていないか念には念を入れ、道を行ったり来たり繰り返しながら、椿太郎と紹利華の隠れている丈の長い草がうっそうとする中で廃屋となっている庵いおひに近付いた。

裏口に回ると二人の声が聞こえる。仲のよさそうな会話だ。

「紹利華ちゃん。もつと色っぽく！」

「はあい。これでいい？ チンタロウ」

紹利華は以前から父、椿太郎のことを名前で呼ぶ。それは母の梨華が『父上』と呼ばせることを失念していたからに他ならない。梨華はそのことを後悔していたが、椿太郎にとっては可愛い娘が浮世絵のモデルになって「チンタロウ、チンタロウ」と親しげに呼ぶのはむしろ心地良いものだった。

「だめだめ、紹利華ちゃん。もつともつと大胆に」

「じゃあ、これわあ？」

「わあ。すごい！ もつともつと」

「じゃあ、こんなこともしちゃったりして」

「わっ！ すごい！ いいよ！ いいよ」

何バカなことやってるのよ。ったく！ 椿太郎の奴。

「椿太郎様。妻の梨華です。梨華が参りました」

「げげっ……梨華！」

げげって何よ。失礼しちゃう。

ここで梨華は椿太郎との間であらかじめ決められていた合言葉を発した。念のため相手を確認するためのものだ。

「狸！」と梨華。

「狐！」と椿太郎。

「ねずみ」と梨華。

「みみずく」と椿太郎。

「まだまだだ」

ええ？ そこまでだったじゃないのよ。

「みみずく、のあとは？」 椿太郎はその後に続く言葉を求める。

これって、もしかして合言葉じゃなくて、単なる尻とりごっこ？

「あ。あの。くっ、熊」

「まんぐーす」

まんぐーすって何よ！ 聞いたことない。そんな動物。

「早く！ まんぐーすのあとは？」

「す。す。す……。ああ、あつた。スズメ」

「メス猫」

「ええっ？ ずるいよ。メス猫なんて」

「早く！ メス猫のあとは？」

「ご。ご。ご……。ええつと、鯉」

「いりおもてやまねご」

ええっ？ 何？ いりおもてやまねこって。しかもまた、『こ』
だよ。

「こ。こ。こ……。ええと。狐狸庵先生」

「ダメだ。それは動物じゃあない」

「違うわ。狐狸庵って、ちゃんと動物入ってますから……」

「よし。特別に許す。中へ入れ」

椿太郎って、天才なのか馬鹿なのかよくわからないよ。ったく。

紹利華を抱き上げる梨華。

「寂しくなかった？ 紹利華」

「リカア。ロリカ、チンタロウがいるからちつとも寂しくないモン」

「……………」

稽古場（道場）の存続再開に今の稽古場には払えるはずもない五百両を要求する無頼漢。しかし、その男、海老原伴太郎は無頼漢ではなく、南町奉行の筆頭与力である。

師範代を守ろうとした師範の父上と指南の何某一刀齋が帰らぬ人となってしまったことを梨華は椿太郎に告げた。

猛烈な恨み心を抱いて椿太郎へこれを伝えた梨華は、椿太郎の冷めたような態度に失望した。

しかし、梨華は、椿太郎から南町奉行の海老原伴太郎の生い立ちを聞いて啞然とした。

海老原伴太郎という人物

伴太郎は延宝五年（一六七七年）生まれ。現在四五歳。家族は水戸藩開藩当時よりの代々三一（さんびん：下級武士）であつたが、元禄九年（一六九六年）若干十九歳で、望月家の亜流ながらも同派の流れを汲む神武真興流剣術の師範代となり、翌年免許皆伝を授かる。二十歳の年で免許皆伝とは、余程天賦の才に恵まれているのか異例の大抜擢である。

その後は、水戸藩三代目藩主、綱條公つなえだの陰なる警衛に勤番する者として二十年ほど仕え、綱條公の没後は將軍吉宗公より類い稀なる剣術の腕を買われて、江戸城の殿中菊の間に小姓組番頭らとともに詰め、將軍の直接警護に当たるようになったという。

その後、城内で二度にわたる狼藉者（ろうぜきもの：暗殺者）を手打ちにし捕獲した功績が認められ、將軍吉宗公より絶大な信頼を得ることになった。

ところが彼にとって殿中にほとんど詰めている勤務形態は苦痛であつたらしく、一年ほどした後、自ら職を辞し江戸城を出る。そして、その二年前に伊勢国度会郡いせのくにわたらいぐんの山田奉行から江戸の町奉行に抜擢された大岡忠相（越前守）のもとに仕えるようになる。

ほどなくして伴太郎は町奉行の筆頭与力になり奉行の警護班をとり仕切る重役を任される。与力と言つてもいわゆる御家人（御目見以下）ではなく位の高い旗本（御目見以上：おめみえいじょう、將軍に接見することの認められている者）の位や権限を与えられており、役方（文官）とともに江戸城下の治安を預かり市中を練り歩くようになった。

しかし、伴太郎はやがて悪徳なことで知られる幕領代官の陣屋（代官所）へしばしば出入りするようになり、それまでの名声や華々しい功績とは逆に、今では完全に悪の手に染まってしまつていくといふ。

見回りと称して、次々と稽古場荒らし（道場破り）をして金を強請^すったり、主の娘や孫娘を手籠めにしたりさったりして遊郭へ売りさばくなど、悪業の限りを尽くしているという。また、仕置人（殺人請負人）としての裏の顔も持つていて、そこでもまた法外な報酬を得ているらしい。しかし、かつての江戸城内の人脈を利用して、幕府の若年寄らに、手に入れた莫大な金の一部を渡しており、完璧なまでに悪業は黙認されているという。江戸城内の番方ですらそうであるから、ましてや町奉行の与力や同心などは、彼に指一本触れることさえできない。もはや放免するしかないのだ。

しかしお上（幕府の老中や奉行の大岡忠相）はこのことを全く知らない。巷に情報提供者を直接配置し、常に世情を詳しく調査している將軍吉宗公のもとにも恐らく伴太郎の悪業の情報は伝わらないであろう。伴太郎がかつて將軍直々の信頼を得ていたことは皆が周知の事実だから、さわらぬ神にたたりなし、というものだ。

椿太郎は言う。

「事故に遭ったと思い、諦めるよりないのだ」

「將軍様に直訴出来ぬのですか？」

「奴は陰ながらも、徳川御三家水戸藩に永らく仕え信頼のお墨付きを得ている上に、江戸城内の人脈も固めている。さらに、町奉行も味方につけており、奴のことで直訴など出来るはずがない。斬つて捨てられるのがオチだ」

「では、仇討ちでは？」

「仇討？ 我は南町奉行に追われている身だぞ。仇討ちなどと、正義感を振り回して、ノコノコと出て行った日にゃあ、どんなことになるか。赤ん坊だつてわかるうつてもんだぜ」

梨華はその言葉を聞いて、やはり椿太郎は宗家跡目となる「器」ではないと感じた。永々と続いてきた望月家の危機である。危機というより潰されたに等しい。しかも実の父が殺されたのだ。どんな

に相手が手ごわかろうと、命投げうってでも報いてみせる、という
気概がないのか……、と。

何故、こんなにも冷静でいられるのだろう。

梨華はますます稽古場荒らしの伴太郎に対し恨みを募らせ、そして
椿太郎に失望し久々の夫婦の交わりも冷めた人形のように為した。

梨華の錯乱

梨華は腰抜けの椿太郎を諦め、自分の命と刺し違いに仇討ちの覚悟を固めた。

しかし梨華が伴太郎のいる奉行の番所に赴いても容易に中へは入れてもらえないだろうし、仮に入れてもらえたとしても脇差を携えたまま建屋へ入れるわけがない。

市中に出ている所を襲う？

いや、奴はいつでも町奉行の与力や同心を数人従えていて、刺し違えるどころかその前に切り捨てられてしまう。これでは犬死にある。

屋敷へ忍んで夜討ち。

暗殺？ 下半身デブで目立つ顔立ちの梨華にこの作戦は全然むいていない。というか、そもそも梨華にそんな頭脳プレイが出来できるはずもない。

梨華は真剣に考えた。

いったいどうしたら奴に近付くことができるのだろう。

果たし状を突きつけ仕合いを申し入れるしかない。それならば、仇の伴太郎にほぼ確実に会えるだろう。手合わせを申し入れられた者から逃げるような土はいない。

しかし、その計画には絶望的な欠点があった……。それは何か。梨華が伴太郎に仕合いを申し入れ、万に一つでも、億に一つでも兆に一つでも、豚が木に登ろうとも、宇宙が逆になろうとも、勝てる相手ではないということ。

当たり前だ。仕合いで勝てるのだったら、もともとこんなに悩んだりしないよ。

それでも梨華は何か方法がないかと考えた。

其の一、

伴太郎がよく訪れる代官所に入った後、予め雇っておいた人夫数人に急いで門の前に落とし穴を掘らせ、伴太郎を大声で呼び、穴に落ちたところを別な人夫に糞尿を頭から掛けさせ、最後に上から槍で刺す。

門の番役がいるから、穴を掘つてるとき「貴様ら！　そこで何をしている」と言われたら困る。「落とし穴掘ってます」とは言えない。この作戦ははなから実行自体不可能だ。

其の二、

伴太郎を書面で寿司屋に誘い出し、雲丹うんたんに似せて大量の南蛮辛子を載せた軍艦巻きを食べさせ、うるたえたとところを斬り捨てる。

誘いに簡単に乗るわけがない。それに、もしも辛いものが得意で、大好きだったら何にもならない。

其の三、

伴太郎を書面で蕎麦屋に誘い出し、蕎麦の中に大量のわさびを練りこんでおき……………。

寿司屋と同じことだよ。これも駄目だ。

其の四、

町人の子供に杏飴か餡子餅を与えて誘い、百人くらいの子供を集めて伴太郎と与力、同心を取り囲み、屋根にも上がらせて一斉に石を投げさせる。うるたえたとところを斬り捨てる。

うん。これ、いいかも。でも……。誰か子供に「おじちゃんたち狙われてるよ」とか、告げ口されたらおしまいだ。

其の五、

民家の屋根から大量の胡椒を振り撒き、くしゃみした瞬間に斬り捨てる。

よし！ これのほうが一人で出来るからいいみたい。でも……。撒いてる自分はいくしゃみ出ないかな。出るよね。やっぱり、駄目だ。

其の六、

ええい、もう、こうなったら色仕掛けだ。紹利華に、「おじちゃん。あたい、おしっこしたくなっちゃったから誰も来ないように見張っててね」と言わせ、その場でさせる。奴がおろおろしている間に背後から斬り捨てる。

だめだ！ 奴がロリコン趣味の変態じゃなかったら、計画は成立しない。そうだ！ そのときは、私が紹利華の代わりをやればいいんだ。

ああ、でも、気色の悪い女だ、とか思われたらどうしよう……。

梨華は頭が錯乱状態の一步手前だった。

ああ、駄目だ、駄目だ、駄目だ！

頭を抱える梨華。

仇討ちが無理だとすれば、いつそ自害して誰かに介錯を頼んで、思いつきり白目剥いて口尖らせた首を送りつけてもらい、奴が怖くて夜一人で廁へ行かれないようにでもしてやるか！

子連れ狼登場！ うそ。必殺仕置人登場かあ？

途方に暮れてうろうろと徘徊を始めた梨華は、気が付くと市中からかなり外れたところに一人ぼつんといた。

ふと、そのとき、古びた寺社が梨華の目に入ってきた。境内には半ば朽ちたような立て看板がやや斜めに砂土の所に突き刺さっていた。

『子貸し腕貸しつかまつる この先右へ曲がりてすぐの屋敷へ』

梨華はピンときた。仕置人（殺人請負人）だ。

梨華は、この、立て看板に書かれた文が、どこかで見聞きしたことがあるように感じたが、気のせいだとすぐに思い直した。

（念のため、この話はいわゆる劇画小説『子連れ狼』とは無関係である。だいいち挿し刀は実在する人物ではないし、子連れ狼の話自体、四代將軍徳川家綱の頃の話であり、時代背景も異なっている。）

入口の引き戸が開いていて中へ入ると、そこには年の頃、三つ四歳くらいの子供がわら人形を持って遊んでいた。

さすが、仕置人の子供だ。遊具がわら人形とは……。

（もしかして大五郎ではないか、などと思っではいけない。その子供は、残念ながら大五郎とは似ても似つかぬ鼻垂れ小僧である。念のため。）

「おつかあ」突然、その子供は叫んだ。

「！！ おっ、おつかあですって！？」

やったあ。こっ、こんな、こ汚い子供に母親などと言われる覚

えなどないわよ！

梨華は少しむっとしたので、その子の頭をコン、と叩いた。

その子は、猛烈に泣き出した。

「びえー、おつかあ勘弁して、勘弁して！」

わああ、私、そんな酷いことしてないよう。でも、ごめん、ごめん。

梨華は両の手を合わせ、その子供に祈るようにして、自分の行為を反省し謝罪した。

子供は突然泣きやみ、梨華の方に鋭い目を向けた。

よく見るとその子供は、手に文のようなものを持っている。

「ちよつと見せていただける？」

見てみると『格安仕置人。一人三両で請負し候』と書いてある。信じられないほどに格安だ。

本当に大丈夫かなあ？

しかし、わらにもすがる思いとはまさにこのときの梨華の感情そのものだった。

梨華は、決して仕置人に伴太郎の殺害を頼む気はない。仇討ちであるならば、最後に息の根を止めるのは梨華自身でなくてはならない。彼女は仕置人の手を借りて目的を達することを考えていた。

そう、仕置人が奴の動きを止める。

そして、梨華が息の根を止める。

しかしながら、伴太郎はご公儀の認める稀代なる剣術の達人だ。仕置人も相当に腕に覚えがない限り決して為し得ないことである。

どこの馬の骨ともわからない仕置人ではあったが、梨華はこれに全てを託すことにした。

文には、今晚、子の刻、この場所でもう一枚の文を渡すと書いてあった。

梨華は、寺の本堂の裏手で横になって時を待ち、指示通り子の刻に子供のいた屋敷に入った。子供がまたわら人形で遊んでいたが、今度は人形が血塗られている。

「おつかあ」再びその子供は叫んだ。

「!!! だから、おつかあじゃないっての!!!」

子供は梨華にもう一枚の文を渡してきた。そこには図柄が描かれてあって、前にももらった文に描かれている図柄と重ねて行灯に透かしてみるよう書かれてあった。重ねてかざしてみると、図柄の重なったところにはつきりと地図が浮かび上がってきた。そして、『明朝、明ける前の寅の刻、地図のところへ』と書いてあった。

凄そう！ 仕置人の三人

書かれてある指示通り、梨華が寅の刻に地図の場所に行ってみると、そこには閉店中の蕎麦屋があった。引戸を開くとねずみの被りかぶものが置いてあり、『之を頭かしらに被り付けよ』と置紙があった。これを被り中に入ると広い板の間の部屋の正面には能面を付けた男が座っていて、両側手前には二人の者が床に片膝を立ててこちらを向いている。向かって左は、狸の被り物をつけた全身黒ずくめのかなり太った者。右は明らかに女性とわかる。何も被りものを付けてはいないが、目の部分だけが開いた同じく全身黒ずくめの者だ。その目は、いわゆる目尻の吊り上った『狐目』の典型である。

唐突に狸の被りものを付けた男が「狸！」と叫んだ。続いて狐目の女が「狐！」と叫ぶ。思わず梨華はつられて「ねずみ！」と叫びてしまった。

しまったあ！ 確か文には合言葉のようなものが書いてあったような気がする……。うう。肝心のものを見落としてしまった。

梨華は、文に書かれていたらしい合言葉ではなく、思わず夫、椿太郎との合言葉の癖が出て「ねずみ！」と言ってしまったのだ。

しかし何という偶然だろうか。梨華はねずみの被り物をしていて、合言葉は結果的に当たっていたようだ。

なんだあ。これも単なる尻取りじゃん。

狐が目にも留まらない速さで梨華の前へ来て掌を重ねて出してきた。くれくれ、というように指先が動いている。梨華は、まずは手付け金か、と一両をその掌の上に置いた。しかし狐は首を横に振った。梨華は二両目を重ねた。しかし、狐はまた首を横に振る。正面

の能面の男が重々しく口を開いた。

「完全前金制でござる。三両ポツキリ明朗会計じゃ」

ポツキリって何のことだろう……。でも、まっいつか。安いから。

梨華が三両目の金貨を狐の掌に載せると、金貨と掌が突然視界から消え、梨華が驚いて顔を上げると狐は何事もなかったかのように元の場所におさまっていた。梨華はこの様子を見て思った。

くの一忍者だ。きっとそうに違いない。相当訓練されているみたい……。

再び能面の男が口を開いた。

「して、標的はいずこの者にござるか」

「元、殿中小姓組大番頭心得指南役、今は南町奉行筆頭与力であり、神武真興流猪鼻派剣術の免許皆伝、海老原伴太郎にござります」

梨華は舌を噛みそうになりながらも何とかそれを告げることができた。

狐が、これを聞いて突然立ち上がり懐に手を入れたかと思うと、次の瞬間、鎖鎌（くさりがま）が梨華の後方の塗り壁に突き刺さっていた。梨華の首筋からはすうつと一筋の血が流れ僅かに襟を汚した。

梨華にはいったい何が起こったかわからなかった。ただ自分が僅かに出血したことだけは何となく首の温かみからわかる。

「止めい！」能面の男が怒鳴った。

狐が鎖を引く。鎌が抜けそのもち手の部分が目にも留まらぬ速さで狐の手の内に納められていた。

能面の男は立ち上がり突然部屋から去って行った。

狐の目は、明らかに血走っている。

梨華は、自分の首筋をかすめるように狐の放つ鎖鎌が通過したことに今になって気付き、背筋がぞくつとした。しかし、梨華は敢えて気丈そうにして見せて言った。

「そなた、海老原伴太郎という名に怖気付いたか。それとも三両では不服か」

それを聞いて狐の目に薄ら笑いが浮かんだ。

「ちょこざいな。それがしの手にかかれば、如何なる剣術の達人であろうと屁もないというものじゃ」

気の強い女！　こんな女と一緒に行動するの嫌だなあ。でも、鎖鎌の使い手としては超一流みたい。まぐれじゃなければね。

梨華は言った。

「奴を殺してくれとは申しておらぬ」

「これはまた、異なることを……」

「無念の父上に替わつての仇討ちにござる。わらわが息の根を止めるのじゃ。そちには果し合いの相手をしてもらい、奴を瀕死の状態にしたところで、『父のかたきい』ってな具合にわらわが脇差を抜いて奴を討つものじゃ」

狐はあきれたような目をした。しかし、その表情には何か納得のいくような顔色も混ざっているように見えた。

「いいとこ取りか。たわけ者めが！　まったく近頃の女子おんなは調子がいい。世も末じゃの」

こいつう！　お前だつて女子おんなだろうが！　偉そうに口の減らない女だ！　馬鹿にされて堪るものか！　ようし……。

梨華は立ち上がって狐を力強く指差した。そして狐に背を向けて思い切り胸を張って言った。

「無礼な！　くの一ごときが片腹痛いわ！　わらわはそちと違い由

緒ある武家に嫁ぎし身じゃ。わらわを 馬鹿にするということは、家系を愚弄するというものじゃ。情けのうごござるぞ！ 前言を撤回いたせ！世には許せることと許せぬことがあるのじゃあ！」

決まった！

……しーん。

「あのう、もし」

「何じゃ。デブ狸」

「狐はもう、とうに居りませぬ」

「何とな？」

狸の男も広間の奥の襖を開けて今まさに部屋を出るところだった。梨華は、ぽつんと一人立っている。

「これ、狸。話は未だ終わっておらん。狐を呼び戻してこぬか！」

狸は急に神妙な顔になって言った。

「話は、お受け申したでござる。お主は果し状を南町奉行へ持て。果し状は、『真剣手合せ』にて長尺・中尺・短尺のいずれも剣術に使いしもの、尺・形状ともに一切の制約を廃する。防具は、鎧・兜はもとより、鎖にて身を覆うも無論禁止なり。我らは、例の屋敷にて伝達を待つ由。ところで、お主は、果し状を渡したる後、返り討ちに遭うやもしれん。念のため脇差を携えて参上するが良いぞ」

狸は滑舌が悪いうえに大きな被り物を付けているので言葉がかなり聞き取りにくい。

実際の音声的にはこんな感じである……。

「はなあああおうえもついたんでござう。おうしわはたしじょんをみんまみびひょうへもへ。………」

しかし、梨華はほとんどの内容を汲み取り、胸をほっと撫で下ろした。

そして、梨華は仇討ちのその日のことを想い浮かべた。すると急に胸が熱くなってきた。

「かたじけのう……ござりまする」と小さな声で呟いた。

「いはいはむんはいなひ」

「はあ？」

「いはいはむんはいなひ」

ひどすぎ。何言ってるかわかんねー！

しかし取り敢えずわかったふりして「御意！」（承知！）と言った。

「ひっひっひ」

あれ？　なんかまずいことなってるかな？

果し状

梨華は伴太郎への仇討ちを果たすため、果し状を手渡しに奴が普段詰めている南町奉行へと愈々（いよいよ）向かう。申し入れる決闘の日は明後日の夕刻、廢墟と化した稽古場（道場）の四隅あんに行灯どんを燈し、真剣にて行うという内容だ。

しかし、決闘と言うのはあくまでも伴太郎をおびき寄せさせるための手段であって、真剣手合わせなどというのは真つ赤な嘘である。完全な騙まし討ちに等しい。まさに武士道としては卑怯千万であり、いくらこの時代、『仇討ち』の正当性が認められているとはいえ、また、伴太郎が悪業の限りを尽くしているとはいえ、武士の女房として、この振る舞いは許されるのであろうか。

梨華は、ふと自分のしようとしていることを振り返って余りに理不尽な最期を送ることに少し悔いが残った。

しかし、もう後戻りなどすることは出来ないし、そんな気は微塵たりとも梨華にはない。

梨華が、仕置人である能面の男、その手下の狐、狸とともに伴太郎を討つことが出来るか否かは全くわからない。今回のようなほとんど不意打ちと言ってもいいような手段を以ってしても、それは容易なことではないと考えられた。

梨華はもはや自らの命を、義父と三途の川を隔てた此岸（しがん：現世）に残したまま仇を討つなどということは考えていない。その心は既に義父がありし彼岸（ひがん：あの世）にあった。

たとえ、刺し違える（互いに命を奪い合う）ことが出来なくとも、仇である伴太郎に父と同じく命奪われるのなら、それはそれでまた、本望なこと……。

その覚悟だけが、唯一、彼女が許される余地を与えているようにも感じられた。

梨華は、伴太郎に会わずして命を落としてしまうわけにはどうしてもいかなかった。髪を束ね、着物の袖を束ねるためのたすきを手に持ち、滑舌の悪い狸に言われた通り念のため、一尺八寸の長めの脇差を帯止めに巻いて奉行所へ向かった。

果たし状は本来当人に手渡しするものだ。人づてに渡すものではない。

しかし梨華は、伴太郎本人に会わせてもらうことが出来なかった。これは彼女が決して予想していなかった展開ではない。彼女は作戦を切り替え、門の外にいた番方に『大切な恋文』といって必ず本人に手渡してもらえよう言伝えた。着物の裾をちらりちらりと開いて『ご褒美に期待してね』と言わんばかりにだ。

番方は、『恋文』をしたため直々に持参してきた女子おなこの格好が、それらしくなく、脇差まで携えていることを異様に感じた。そして、すぐさま伴太郎へ『大切な恋文』を届けに行った。

かくして、彼女の悲しい結末は刻一刻と迫りつつあった。

稽古場（道場）の決闘

果し状にある廃墟と化した稽古場（道場）。

そこには数々の教授陣の名札が今も並んでいる。しかし、今は亡き師範、望月椿太郎左衛門と、指南、何某一刀齋の二名の名札は際だって強い怨念を周りに漂わせているように梨華には感じられた。

正面の入口から入った真正面に、狐が仁王立ちとなって海老原伴太郎を待っていた。その出で立ちは、女ながらも、仕合いに臨む稽古場（道場）主のような堂々たるものだった。

能面の男の姿はない。狸は狐よりやや下がって立ち、『その時』を待っている。

梨華は狐の姿を見て、最期の覚悟を決めるとともに目に涙が潤んできた。

狐、ヤバーイ！ 超かっこいい……。

でも、できれば能面の男みたいなフツの剣士に来てもらいたかったなあ。狐は忍者だし、狸は超デブだし。

梨華はデブは決して嫌いではない。むしろ好みとするタイプだ。

しかし、黒ずくめのデブは見た目何となく暑苦しいし、だいいち決闘という緊迫した空気にはやっぱりそぐわない。

ほぼ定刻になって、海老原伴太郎が入って来た。一人だ。かなり長めの打刀（うちがたな）と、脇差、小柄、の三本の刀を差している。改めて近くで見るととてもなく体格がいい。

格好はというと、あの時、稽古場荒らしに来た時のような落武者のようなものではない。南町奉行、筆頭与力のビシツとした格好である。

あいつだ！ あいつだあ！ ついに会えたぞう！

梨華は震えながら足を踏み鳴らした。憎き、恨めしき伴太郎の顔は決して忘れることはない。たとえ地獄に堕ちようとも……。

伴太郎は稽古場に五、六歩入ったところで、正面にいる狐とまっすぐに向き合った。狸は伴太郎から見て狐の斜め後方に位置している。狐のほぼ真後ろに梨華が脇差を差して震えながら立っている。

両者無言のまま時が流れた。

お互いに名乗りもしない。決闘を申し入れた者が誰か、海老原伴太郎には果たしてわかつているのだろうか……。

次の瞬間である！

それは俄かには信じ難いことだった。

「芝居は、これまででようござろうー！」

伴太郎が顎をしゃくり上げると狐と狸が彼の方へゆっくりと進み両脇に並んだ。そしてもと狐の後方にいた梨華と対峙した。伴太郎は懐から能面を取り出して顔に付けた。

「……！」

能面の男はまさにそこにいた。梨華が殺人を依頼した男、伴太郎それは仕置人のボス、能面の男自身だったのだ。

「たまげたぜ。殺害を当人に依頼するたわけ者がこの世におろうとはな。それがしの、うな（首）を取るなぞ、片腹痛いわ。百年早い。は、は、は。女人相手に抜刀するは、それがしの趣味にはござらぬやい、狸。貴様に任す。その女子、貴様の好きにするがよいぞ！」

梨華の頭の中はぐるぐると回った。そして次に自分の命が、人間の『屑』である奴に奪われるのを望んでいた考えを撤回し、もうこ
うなれば自ら命を絶つしかないと考えた。

梨華は長めの脇差を抜いた。

狸は一瞬慌てたようなそぶりを見せたが、伴太郎に『好きにせよ』
と言われながらも全く動かなかった。

「狸、いかがでした？」伴太郎が問う。

「貴様、女子は、好まぬかや？ しかれば狐。貴様がやれ。その女
子を腰巻一枚にさせ、貴様の手裏剣にて舞を躍らさせてやれ。そし
て舞の仕上げに地獄へ送りてやれ」

梨華は、本当にこの段階で自害しても良かった。しかし、自分自
身の不甲斐なさにどうしようもない未練も感じていた。亡き義父に
対してこのままでは申し訳なく、死んでも死にきれないような気持
ちが心を襲った。

それだけが梨華が自らの首を斬ることを躊躇させていた。彼女の
目は血走り、やや厚めの下唇が小刻みに震えている。

私は肝心なときに、何て間抜けなことをしてしまったのだ。

十一人の侍

突然低い声で狸が伴太郎に向かって言った。

「地獄へ墮ちるは、お主のほうぞ」

それと同時に狐と狸が伴太郎の脇をさっと離れ、腰を落として構えた。

「何！？ むう？ 狸。これは異なことを。解せぬぞ。訳を述べる！」と伴太郎が言う。

「不届き者めが。神妙にしろい！」と今度は突然、狐が叫んだ。

！ 狐！ あなたは……

「お主の所業、知る人ぞ知れようぞ」と狐。

伴太郎は能面を取り、狐をかつと睨みつけ、その後ふつと笑った。「狸は、それがしに従いてより、うすうす信用ならぬ下郎であると感じておった。だが、狐。貴様が寝返り、それがしに牙を剥くとは。う。いかが申し開く所存か」

狐が叫ぶ。「やかましやい！」

顔を歪めながら伴太郎が言う。

「のう、狐。貴様、その狸にいったい何を吹き込まれたのでござるか」

その時梨華はあることに気付いた。この男、伴太郎は明らかに動揺している。彼は狐をよほど信頼し評価していたに違いない。裏切られたことにうろたえて、彼は狐をもう一度自分の味方に取り込もうとしている。伴太郎の心には明らかに『迷い』が生まれている。『迷い』が剣術にとって最大の敵である、とは亡き義父の言葉だ。

梨華はひよつとして狐が……、彼女が唯一、奴を倒す資格を天から与えられた者ではないかと感じた。

狐は容赦なく言った。

「やいやい、黙りやがれ。悪しき所業、犯罪の数々。全部ばれておる。それがしは、もはやお主の組下（子分）にはござらぬ。お主はこの世にいてはいけない輩だ。お主、いや、貴様の魂をこれより奪おう。覚悟しろい！」

「ふざける、狐！ 貴様は公儀に盾突くつもりか？ そもそも貴様如きにそれがしを倒せる訳がない。この未熟者めが。小娘の分際にて身の程を知れい！ 今であれば、まだ許し申そうぞ。まずは、そこに居る狸をぶち殺すがよい」

この期に及んで伴太郎はなお、狐を取り込もうとしている。それは心の乱れ、すなわち『迷い』以外の何ものでもない。

対する狐の心には微塵たりとも『迷い』はない。狐は大きく武者震いをして構えた。僅かに見える眉間には深い溝が刻まれている。そして肩は怒りに震えている。狐は狸のほうを見た。

すると狸は天を仰ぐようにして叫んだ。

「一、狸！」

「二、狐！」狐と狸が一斉に梨華の方に視線を向けた。

ええっ？ 私の番？ 聞いてないよ。

しかし、これから命を賭けて仕合いに臨む涙ににじんだ狐の目を見て梨華は自分を恥じ、そして叫んだ。

「さっ、三、ねずみいー！」

「『い』ではない。『み』だ。四、みみずく！」伴太郎の背後で声がした。

見るとカラス天狗のような変な嘴くちばしを付けて頭に鳥の羽を沢山挿し

込んだ男が稽古場の入口から入ってきた。音を立てないような忍びの歩きである。隙がなく腕はそれなりに達者そうだが、恰好は中途半端で間抜けである。

続いて「五、熊！」浪人風の大柄な男。被り物がいい加減で完璧に手抜きである。しかし風体は熊そのものだ。

「六、まんぐーす！」イタチのような被り物をしている。

まんぐーすってあんな感じの動物だったのかあ……。

『遠き島にありし生きもの。小さきものなれど、毒蛇に勇敢に挑みこれを制する……』

梨華は寺子屋で教わったことを思い出した。

「七、すずめ！」

また嘴を付けた男。頭の毛は薄い、絵筆で地肌を茶に染めている。

「八、メス猫！」

腰に二本の脇差を付けた小柄な女が入ってきた。何やら目つきがイヤラシイ。

「九、鯉！」

いわゆる伝説の『半魚人』と言われるような気色の悪い被りものをした男が入ってきた。

「十、いりおもてやまねこ！」

虚無僧のような傘を被っている。動物の被りものではない。しかし、傘に『いりおもてやまねこ』と書いてある。

こいつ。ゼツタイ『いりおもてやまねこ』って知らなくて誤魔化してる……。

さしもの稀代の剣客、伴太郎も明らかにうろたえている。てか、ドン引き。

妙な間が開いた……。合言葉の十一番目。何だっけか。ああ、そうだ。そのあとは狐狸庵先生である。

狐狸庵先生。いるはずがない。しかし、伴太郎は嫌な予感がした。稽古場の端で南蛮渡来の『椅子』なるものに腰を掛け足を組み、これまた南蛮渡来の『唐茶』（コーヒー?!）なる焦げ臭い飲み物を湯気を立てながら飲んでいる男がいる。頭髪は薄く額が広い。そしてこれまた南蛮渡来の『眼鏡』なるものを掛けている。違いがわかりそうな男だ。その男は辺りに殺気を振り撒きながらゆっくりと立った。

「十一、遠藤周作！」

伴太郎は目を白黒させた。何故『こ』から始まっていないのだ。

「いやいや。もとい！ 十一、狐狸庵先生！」

八人の男と一人の女（メス猫）、九名が伴太郎を遠まきに取り囲んでいた。さらに正面には仁王立ちの狐、その後ろには梨華。

十一人の侍!? 梨華もこうなれば立派な侍の一員だ!

死闘、そして壮絶なる最期

伴太郎は真剣を抜き、叫んだ。

「ええい！ これは何の戯たわむれなるものぞ！」

一瞬の間もなく狐の手からは分銅を付けた鎖のようなものが放たれ、伴太郎の持つ刀の刃元にしっかりと巻きついた。刀を動かせなくなつた伴太郎は刀を左の手に持ち替え、脇差を抜き構えたが、その動きは一瞬遅かつた。

続けて狐の手から放たれた人の顔ほどもある大きな手裏剣が伴太郎の脇腹にしっかりと刺さっていた。そして脇差が床に転がつた。武器である刀も、体の動きも完全に封じ込められた伴太郎。その顔は醜く歪んでいる。

隙を見て狸が背後から伴太郎を羽交い絞めにした。狸の手にはなんと彫刻刀が握られている。

「梨華！ 来るのだ！ 己おのが手で亡き父の仇を討つのだ！」

「！！！」

もはや、あの滑舌の悪い狸の声ではない。それは他ならぬ愛しい夫の声であつた。ぐうたら男？ ではない。あの人の声……。

椿太郎！ そなたは椿太郎！

「はっ、早く！」

「で、出来ない……、私。そんなこと」

「ばっ、馬鹿。何故出来ないというのだ！」

伴太郎の腹から刺さっていた手裏剣が落ち、どす黒い血が流れ出た。それでも伴太郎は、狸、いや、椿太郎の腕を振りほどき、怪力に任せて右腕一本で巨漢の彼を放り投げ床に叩きつけた。彫刻刀が床を転がつた。伴太郎は、狐の鎖で自由のきかなくなつた打刀一（

うちがたな：本刀をしっかりと握りつつも、床に転がる脇差を取りに走った。しかし伴太郎はそれを手にする寸前に背中から真っ赤な血をほとばしらせた。

背後には、いりおもてやまねこの男がいて、その刀には血糊がついていた。彼が伴太郎の背に太刀を入れたのだ。『いりおもてやまねこ』と書かれた傘が床に落ちて転がり、そこにあらわれた顔はあの稽古場（道場）師範代である清水又吉であった。そしてその真っ赤に充血した目からは一筋の涙が流れ出て頬をつたっていた。

「又吉様！」と梨華が叫ぶ。

「ぐおっ！」

背と腹の両方から血を流す伴太郎。

それでも伴太郎は三本目の短い小刀、『小柄』を抜き、清水又吉に刺しかかる。よろけながら又吉の腹からは血がほとばしり出た。

ほぼ同時に伴太郎の『小柄』を握る腕からも血が噴き出した。

狐が再び大きな手裏剣を放ち伴太郎の左腕を『小柄』とともに斬り落としたのだ。

狐は鋭い目をして梨華の方に振り返った。

「どうした！ 梨華殿！ 何故出来ぬ！ 時が到来しようぞ！ 己おのが魂はどこへ行った！ 此はまさに己が依頼ぞ！ 己が望みぞ！」

次の瞬間、鎖に巻かれた伴太郎の打刀が、彼の手から狐に向かつて放たれた。そしてそれは狐の胸板を貫通した。

恐るべし不死身の伴太郎。

「きやあ！ 狐、狐、狐！」

梨華は叫び狂った。狐は恨めしそうな顔をしながら床に崩れた。

「はっ、早う、せつ、せぬか！ りっ、梨華殿！ 奴はもう、なっ、為すべす術がないのじゃ！」

狐の断末魔の叫び声だった。

「やああああ！ 父のかたきい

！」

梨華は脇差を抜き、床に膝を着いている伴太郎めがけて突進した。そして渾身の力を込めて彼の胸にぶつかった。

「ぐおう！」

伴太郎は立ち上がり梨華の襟元をつかんで彼女を床に叩きつけた。梨華は腰を激しく打ち、人形のように床に転がった。

伴太郎は背と腹と右腕から血を噴き出しながらも左手で脇差を拾い、これをかざして梨華を殺めようと転がる彼女の方へよろよろと進んだ。

周りにいた剣士たちは一斉に刀を抜いて伴太郎と梨華の間に立ち塞がり彼を威嚇して構えた。不死身の伴太郎はこれを見て戦意が喪失したかのように一瞬立ち留まった。

梨華の脇差は伴太郎の腹を完全に貫通していた。伴太郎はさらに二歩、三歩と歩き、そして大きな音をたてて床に崩れた。

「よう。ようやった！ おのは、ぶっ、武士のかつ、鑑かがみぞ！」

狐は床に平伏しながらも満足そうな目を浮かべた。そして狐はついに絶命した。

稽古場の床にはおびただしい血が流れていた。

「いやあああ！ 狐！ 狐！ 狐！ 狐！ 狐！ 狐！ 狐！ 狐！ 狐！ 狐！」

「梨華殿！」

いりおもてやまねこ、清水又吉は刺された腹の傷口を抑えながら膝を床に擦りながら梨華の方へにじり寄ってきた。

「梨華！」

「又吉様！ 早う、早うにお腹を手当てされませぬと！」

「ははは、入り口だけじゃ。さらしを巻いておる。まだまだ死ぬ訳にはいかん」

負けじと同じように椿太郎も梨華のもとへとにじり寄ってきた。

「そなた。狸。椿太郎、やったよ。私やったよ！ 椿太郎」

「さもありません（そうだよ）。お主は立派立派！」

「ああ。椿太郎……。紹利華は大丈夫？」

「大丈夫だよ。最近、幼い弟分の友達ができたって楽しそうだよ。毎日その子のわら人形で遊んでる。」

「わら人形？　もしかしてその子、鼻垂らしてない？」

「なんで知ってる？　思いつ切り鼻つ垂らしの、こ汚い小僧だ」

「……………ああそう。友達選んだ方がいいかもね」

でも、あの子可哀そう。この後いつたい誰が育ててあげるの？

梨華は「おつかあ」と呼ぶあの子の顔を想像して背中がゾクツとした。

そして三人は肩を抱き合った。

気が付くと、梨華ら三人と戦いに命を捧げた狐の周りには六人の侍が土下座をして人の輪を作っていた。六人の侍は皆、見覚えのある顔だった。

神武真興流剣術の稽古場（道場） 指南役心得所（こころえどころ）の六名だ。

みんな、みんな無事だ。よかった。

「稽古場（道場）再開じゃ」

熊が口火を切った。「そうじゃ」「そうじゃ」……………。みみずくも、まんぐーすも、すずめも、メス猫も、鯉も、六人。

大岡忠相様。きっと私たちのこと許してくれるわよね。ねっ！

梨華は一人足りないことにふと気が付いた。

ん？ あと一人いなかったっけ？ ああ、狐狸庵先生だ。

狐狸庵先生の姿が見えない。どこへ消えたのか……。

あいつ、いったい何だったのだろう。

……そういえば、亡くなった師範、七代目望月椿太郎左衛門は南蛮かぶれだった。そして、眼鏡を掛ければ、もしかして、あんな顔になっただかも知れない……。

「十一人の侍」<完>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5025u/>

十一人の侍

2011年7月2日11時02分発行